

甲斐万福寺旧蔵「源誓上人絵伝」に関する一考察
 一構図の問題と主題解釈をめぐって一

東京藝術大学 鷹野 佳世子

東京芸術大学蔵「観音堂縁起絵」とシアトル美術館蔵「薬師堂縁起絵」は、元来甲斐万福寺に所蔵されていた「源誓上人絵伝」二幅であり、万福寺中興の祖である源誓光寂の伝記を描いたものと考えられている。源誓の往生場面が描かれていないことから現存しないもう一幅が存在した可能性が既に指摘されているが、本発表では二幅の構図と描かれる内容から、現存しない第一幅を含む三幅構成の掛幅縁起絵であった可能性を改めて指摘したい。

芸大本とシアトル本の構図を比較すると、芸大本が左右対称で中心性の強い構成であるのに対し、シアトル本は本堂をやや左寄りに描き、滝や寺院の板塀を左端に配して画面の左側の境界線を意識しているように見える。一方で両幅の建物が一直線上に並ぶなど画面全体を通して構図のつながりが計算されており、二幅で完結する画面構成であるならば芸大本が右端を形成する構図を持たないことはやや不自然に感じられる。そこで、芸大本の右側に更にもう一幅、現存しない第一幅目にあたる画面を想定すると、全体の画面空間は飛躍的に広がり、芸大本の中心に描かれる華やかな法要の図もより一層引き立つことが予想される。

こうした構図の印象から得た着想を元に絵伝の内容についても再検討すると、芸大本とシアトル本にはそれぞれ剃髪・師弟の対話・祭礼や芸能が描かれ、同じ主題が繰り返されることになる。これは源誓上人の出家前後を描いたというよりも、異なる人物の出家因縁と功績を描いていると見るべきではないだろうか。即ち、源誓上人の伝記は第三幅にあたるシアトル本に描かれ、芸大本と失われた第一幅には源誓以前の祖師絵伝が描かれた、いわば絵系図のような性格の掛幅絵伝であったのではないかと推定する。

源誓以外に描かれた人物としては幾人か考えられるが、特に発表者は万福寺に伝来した『阿佐布善福寺上人絵伝』に見る了海上人幼少期の伝記が芸大本下段の少年の出家場面によく一致すること、また芸大本に登場する馬上人物が師の源海上人と見られることから、芸大本及び失われた第一幅に源誓の師である源海上人、兄弟子である了海上人らの行状が描かれていたのではないかと考えている。

以上のように、本発表では「源誓上人絵伝」は単なる一地方寺院の開祖の絵伝という性格に留まらず、関東における初期真宗教団の礎を築いた荒木源海・阿佐布了海・等々力源誓らの行状を描いた絵伝であった可能性を示唆する。加えて、源誓上人が自ら絵伝制作と絵解き勸進に積極的であったことからみて、おそらく本絵伝は源誓本人の主導のもと制作されたものであったことが指摘できる。荒木門徒の空暹が源海の一期行状を盛り込んだ「謝徳講式」を制作したことは良く知られるが、他の門弟の間でも同様に派祖の伝記は重視されたに違いない。「源誓上人絵伝」もこうした関東初期真宗教団の特徴的な性格を背景に制作された作品として、その史料的价值が再注目される。